

「阪神高速 未来へのチャレンジプロジェクト」  
第4回助成・事業実施報告書

1. 基本事項

団 体 名	認定NPO法人みやっこサポート		
事 業 名 称	不登校児童の学び場『IROHAらぼ』	助成額	50万円
申請事業の概要	学ぶ機会を失っている不登校の子ども達が、学ぶ楽しさを知り、良き個性を伸ばし、生きていく力を身につけていくために、個々のニーズや状況に合わせた学びのプログラムやサポート体制を提供する。		
申請事業の目的	<p>不登校の子どもたちの、個々のニーズや状況に合わせた学びのプログラムやサポート体制を提供する目的は以下のとおりです。</p> <p>①学習の欠落を埋める：不登校の期間中に学習が進まないことで、学力の差が広がる可能性があります。学ぶ機会を提供することで、学習の欠落を埋めることができます。</p> <p>②社会とのつながりを保つ：不登校の期間中に学校や仲間とのつながりが薄れることがあります。学ぶ機会を提供することで、社会とのつながりを保ち、社会的なスキルや関係性を築くことができます。</p> <p>③自己肯定感を高める：不登校の経験は、子どもたちの自己肯定感に影響を与えます。学ぶ機会を提供することで、自分の能力や成長を実感し、自己肯定感を高めることができます。</p> <p>④将来への希望を持たせる：不登校の期間中に希望や目標を持つことが難しくなることがあります。学ぶ機会を提供することで、子どもたちが将来への希望を持ち、自己成長や進路に向けた意欲を高めることができます。</p> <p>⑤社会参加の機会を提供する：学ぶ機会を通じて、不登校の子どもたちが社会に積極的に参加する機会を提供することができます。</p>		
関連するSDGs目標	<p>目標3「すべての人に健康と福祉を」 目標4「質の高い教育をみんなに」</p> <p>不登校児童は、こどもの成長のために重要な役割となる教育を受ける権利を制限されているため、将来の学習や職業の機会に制約が生じる可能性があり、また、社会的な経験や交流の機会も制限されるため、心理的な問題や社会的な孤立感に陥ることがあります。</p> <p>このような、心身の健康問題を抱える不登校児童のニーズに応えるための教育プログラムの提供は、SDGsの目標3を促進するための包括的なアプローチとなり、全てのこどもが質の高い教育を受ける環境を重要視した目標4へのアプローチとして、その権利の実現のための支援や代替教育の提供になると考えました。</p>		

## 2. 助成事業の実績・成果等について

本事業では、学校に行けない・行かない不登校の子どもたちに対して、学ぶ楽しさと社会とのつながりを再構築する「第三の学びの場」を提供しました。不登校の背景には、発達特性などさまざまな要因がありますが、共通するのは、安心して過ごせる環境の欠如と、「学ぶこと」「つながること」への不安です。

本事業では、そうした不安を抱える子どもたちに寄り添いながら、個々の状況や心の状態に合わせた柔軟な支援を行いました。

特に重視したのは、学習支援と心理的サポートの両立です。週1回、少人数の個別対応を基本とした学びの時間では、一人ひとりの理解度や関心に応じて内容を調整した学び直しを行いました。

「わかる」という実感が自信につながっていく様子が、子どもたちの表情や言葉からも感じられました。最初は緊張していた子が、学びへの主体性を徐々に回復していく姿が見られました。

学習面だけでなく、「語ること」「関わること」による心の成長も大きな成果でした。活動中は、学びの合間のスタッフとの雑談や、同世代の子どもたちとのちょっとしたやり取りを通じて、自然な形でコミュニケーション能力の向上につながり、子どもたち同士の関係性も少しずつ育っていきました。

さらに、保護者へのフィードバックや個別相談も並行して実施し、家庭との連携体制の強化を図りました。

保護者からは、「安心して学べる場所があってありがたい」「以前より積極性が出てきた」といった感想が寄せられ、子どもだけでなく家庭全体の安定にもつながっていることがうかがえます。

これらの取組は、SDGs 目標 3「すべての人に健康と福祉を」、目標 4「質の高い教育をみんなに」に深く関係するものです。学びを失った不登校の子どもたちにとって、教育は単なる知識の習得だけでなく、「心身の健康を取り戻すきっかけ」であり、「再び社会とつながるための橋渡し」となります。

本事業では、教育を通じて心の安定と社会性の回復を図り、将来的な自立や社会参加への土台づくりを行うという点で、両目標の実現に資する包括的なアプローチができたと考えています。

## 3. 課題分析や今後の発展性

本事業を通じて、多くの不登校の子どもたちが少しずつ心を開き、学びや他者との関わりを再び受け入れていく姿が見られました。しかしその一方で、いくつかの課題も浮き彫りとなりました。

第一に挙げられるのは、継続的な支援の必要性です。子どもたちの多くは、学校でのつまずきや対人関係への不安を長期的に抱えており、短期間の関わりだけでは十分な変化を生むことが難しいケースもあります。特に、参加までに時間を要することもや、ようやく活動に慣れてきた頃に支援期間が終了してしまうような場合、本人のペースに寄り添いきれないもどかしさがありました。こうした背景からも、一定の期間を超えても継続的に関われる体制の整備が求められています。

次に、支援スタッフや関係者の人材育成の重要性も明らかになりました。不登校支援には、教育的な知識だけでなく、福祉的な視点や心理的ケアへの理解も必要とされます。子どもたちの小さな変化を見逃さず、信頼関係を築いていくためには、支援者側のスキルと経験の蓄積が欠かせません。今後は、スタッフ研修や事例共有の場の充実、さらに新たな人材の確保にも力を入れていく必要があります。

また、家庭や地域との連携のあり方も、今後の発展に向けた大きな鍵となります。保護者自身が「子どもに無理のない学びとは何か」と悩んでいるケースも多く見られました。子どもだけでなく、家庭を含めた包括的な支援が必要であり、保護者と共に考え、取り組む姿勢が支援者側にも求められています。

今後は、支援の場をさらに開き、多様な子どもたちが安心して関われる環境を、地域の中により広く構築していくことが課題です。また、行政や学校、他の支援団体と連携し、切れ目のない支援体制を築いていくことも、事業の発展にとって欠かせません。さらに、自然体験や文化活動など、学習以外の豊かな体験をプログラムに組み込むことで、子どもたちの多面的な成長を促すことも視野に入れています。

子どもたち一人ひとりの「小さな一歩」を見守りながら、この事業をさらに充実させ、柔軟かつ継続的な支援を地域に根づかせていく基盤づくりを、今後も丁寧に進めていきたいと考えています。

#### 4. 代表者又は担当者からのひとこと

不登校の子どもたちは、外からは見えづらい不安や葛藤を抱えながら、毎日を懸命に生きています。私たちはその一人ひとりの声にならない思いに耳を傾け、「ここなら来てもいい」と思ってもらえる場づくりを目指してきました。

このたびの助成により、学び直しや他者との関わりを通じて、子どもたちが少しずつ前を向く姿を支えることができました。小さな変化の積み重ねこそが、未来への確かな一歩だと実感しています。

今後も、子どもたちの「自分らしく生きる力」を育みながら、地域とともに支え合う仕組みを築いていきたいと考えています。

温かなご支援に心より感謝申し上げます。